

## 大徳坊の足あと

むかしむかし大昔、今から何千年も昔の事です。そのころこの地方は霧が窪といわれていました。月館の古屋の入に大徳坊山というところがあります。この山の頂きと糠田の東塚山（経塚山ともいう）の山上に一坪ぐらいの窪みのあるところがあります。土地の人々は大徳坊の足あとだといっています。そのころ、ここに世にも珍しい大男の大徳坊が住んでいました。雲をつくような大男で時々きげんが悪い時には、大きな足を広げて経塚山と大徳坊山とにまたがって太陽の光をさえ切ってしまうので、この村一面がうすぐらくなつて稲が実らずお米がとれないので農民は、大変困つたとの事です。

こうした大徳坊のやり方を何とかやめさせようとしたのですが誰の言う事もきかなかつたといひます。しかし大徳坊は少しきげんのよい時は村びとが刈り取つて来た稲の穂をこき落したりして笑っていました。また大きな手で実の入らない稲穂をもんで軽いのみがらを空に吹きとばしたりしていました。そのもみながらうず高く積つた所が大糠塚で少し積つたところが小糠塚だといわれています。大糠塚は今東北撚糸の南の方の小高い丘で、その西の方に小糠塚が出来ているのです。その後、大徳坊も年をとりましたので、どこへ行つたのか村びとの知らないうちに姿が見えなくなりました。

それからはこの村によいお米がとれるようになり、霧が窪という地名は無くなつて糠田村となつたといわれています。しかし大徳坊の足あとだけは、今も残っているのです。